



豊かな日本語力の育成を目指して

—外国人対象、日本人対象の日本語教育研究—

総合教育センター／国際交流センター
助教 中石ゆうこ（なかいしゆうこ）

県立広島大学 広島キャンパス 1132 号室
Tel 082-251-9811
E-mail yukonakaishi@pu-hiroshima.ac.jp



専門分野： 日本語教育 第二言語習得研究 日本語学（日本語文法）

キーワード： 日本語文法 オノマトペ 日本語力 教材 外国人児童 日本人のための日本語

● 現在の研究について

私は、「豊かな言葉は豊かな世界の扉を開けるカギとなる」という信念から、外国人対象の日本語教育、日本人対象の日本語教育の両方に強い関心を持って活動を行っています。研究に関しては、日本語学習者の習得状況の実態を活かした教材、指導法の開発に強い関心を持ち、現在は、次の三つの柱で研究を行っています。

(1)日本語の自動詞、他動詞の形態に関する第二言語習得研究と教材開発

日本語の自動詞、他動詞は、「開く—開ける」、「決まる—決める」のように対をなすものが多いという特徴があります。多くの人が経験するように、英語においても、rise-raise, lie-lay のように形態が異なる自動詞、他動詞が存在し、これらの動詞対のうち、どちらが自動詞でどちらが他動詞かを区別して記憶することに困難を覚えた経験は多いと思います。しかし、日本語の自動詞、他動詞はこのような異形態の自動詞・他動詞対が、英語よりさらに多く、主要な対応パターンだけでも 9 種類ある

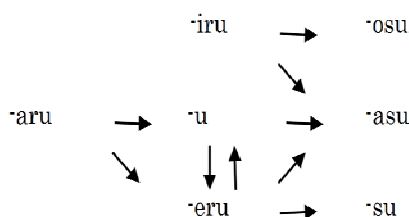


図 1. 自動詞・他動詞 対応図（佐久間 1936:137 より一部改変）※自動詞→他動詞

（図 1 参照）ことから、日本語学習者にとって自動詞、他動詞を区別して、正確な形態を記憶することは大きな負担となると言われています。そこで、多くの日本語学習者にとって泣き所の一つである「形態の複雑さ」による問題を解決するために研究を行っています。

(2)日本語のオノマトペに関する第二言語習得研究と応用

オノマトペの使用をめぐる一番の問題とは、日本語母語話者、特に大人にとっては、それを使ったときに非常に「ぴったりくる」、「しっくりくる」感じがするのに対し、第二言語学習者にはその感覚が理解しがたく感じられるということです（今井・針生 2007）。日本語教育の現場では日本語のオノマトペの指導が難しいことが指摘されています。例えば、中国語を母語とする日本在住のある研究者は、来日当時、レンジを「チーンしてください」の意味がわからなかったと回想しています（彭 2007）。

これまでの研究で、学習者の回答には、例えば「浮き輪で水面に浮かんでいる」様子を「うきうき」、「はらはら」の意味を「元気な様子」などのように、日本語母語話者の使用では見られないような場面と語のマッチングに関する誤用がみられることが分かっています（中石・佐治・今井・酒井 2011）。最終目標として、日本語教育のオノマトペ指導について実証的な研究からの提案を行いたいと考えています。

(3)日本の学校で学ぶ外国人児童の語彙に関するつまずきの解明と語彙リストの作成

近年の国際化の流れの中で、日本でも「外国につながる子どもたち」が増加しています。「外国につながる子どもたち」とは、外国籍の子供に加えて、日本国籍だが家庭内において多言語環境で育つ子供です（川上 2008）。

外国につながる子どもたちは、学校教育の現場におい

て教科の学習だけでなく日本語の学習も同時に必要であることが多いため、学習においてつまずきが起こりやすいと考えられます。具体的なつまずきとしては、「かける数」「かけられる数」を言い間違えることがあるとか、九九をうまく言えないとか、その例示には枚挙に暇がありません。このようなつまずきが見られる、外国につながる子どもたちに向けた支援として、学校現場では現在も様々な取り組みがなされていますが、その取り組みが、痒いところに手が届くものになるためには、教科学習のつまずきの裏に隠れた言語面でのつまずきを明らかにし、その特徴をつかむことが必要であると考えています。そこで、私と共同研究者は、実際の教育現場で見られたつまずきに着目し、日本語を母語としない児童にとってどんな語の指導が難しいのかを観察することで、より丁寧な指導が必要な語彙の傾向を明らかにしようとしています。

【引用文献】

今井むつみ・針生悦子(2007)『レキシコンの構築：子どもはどのように語と概念を学んでいくのか』岩波書店

川上郁雄(2008)『プロフィシエンシーを育てる—真の日本語能力をめざして』, pp.92-109., 凡人社

佐久間鼎(1936)『現代日本語の表現と語法』pp.114-138., 厚生閣(くろしお出版より 1983年復刊)

中石ゆうこ・佐治伸郎・今井むつみ・酒井弘(2011)『中国語話者のための日本語教育研究』第2号, pp.42-58., 中国語話者のための日本語教育研究会

彭飛(2007)『日本語学』26(7), 明治書院, pp.48-56.

● 今後進めていきたい研究について

私に取り組んでいる三つの研究テーマ、すなわち(1)自動詞・他動詞、(2)オノマトペ(3)年少者日本語教育の語彙を今後も継続して遂行したいと考えます。

(1),(2)は日本語教育での学習項目ですが、学習者にとって習得が困難であると言われています。語彙と文法のはざまに位置する項目であるため、語彙的視点、文法的視点など多角的分析が必要になる研究です。(1)に関しては、現在、自動詞、他動詞の区別を効率的に行う方法に関する調査を行うと同時に、研究成果を現場の日本語教師に公開し、実践へと反映しているところです。

(3)は近年社会的要請が強いテーマで、今後日本社会の中で外国籍の人材の流入が議論されるにつれ、さらに重要になると考えられます。いずれも私が日本語教育の現場で得た課題を発端にしており、その解決に向けて中

長期の研究が必要になるテーマです。これからも3つのテーマの成果を相互に反映させ、その相乗効果を生むことを目指して、意欲的に研究に取り組んでいくつもりです。

● 地域・社会と連携して進めたい内容

1. 教材の開発

日本語教育、教材開発に関心のある学校や企業と連携して、学習者の習得の実態を活かした日本語教育で必要となる教材の開発を行いたいと考えています。Web上でのコンテンツの公開(下図参照)、アプリの開発を行い、日本語教育の経験を生かして、学習者に分かりやすいイラストの作成を行うことにも関心を持っています。



図2. HPで公開中の自動詞他動詞学習クイズ

2. 教育プログラムの開発

学習者の習得の実態を活かした日本語の指導方法を導入したい学校と連携して、「当たり前のはずなのに、いつまでも間違えてしまう」初級文法の学び直しに関する教育プログラム、日本語を母語としない児童にとって指導が必要な語彙に関する研究の結果を反映させた指導プログラムの開発を行いたいと考えています。

● これまでの連携実績

広島大学日本語教育学科同窓会の公開講座では「現場で得た問いを研究する」というテーマで、日本語教師を目指す大学生に向けて、教育現場と研究を結びつける必要性を伝えました。別府大学日本語教育研究センターの講演会では「日本語学習者が視覚的に『わかる』教材づくり—自動詞・他動詞を例にして—」というテーマで、授業で絵カードやフラッシュカードを用いる際に陥りがちな問題点を考えました。今後は、日本語以外の語学教育や情報教育、地方行政など他領域との連携を心がけ、より幅広い情報を提供したいと考えています。